

【三谷恵子先生追悼文】

## 三谷恵子先生を偲ぶ

阿部賢一

去る 2022 年 1 月 17 日、三谷恵子先生が逝去された。長年病気を抱えていらっしやるのは知っていたが、定年まで一年と数カ月というこの時期にまさか他界されるとは思いもよらなかった。この二年間、生活がオンライン中心に移行したとはいえ、メールでのやりとりは行っていたし、Zoom などでお顔も拝見していたので、訃報を聞いてしばらくは実感が湧かなかった。そして、今なおその感覚がある。だが、自分の心を整理すべく、そして何よりも追悼の意味を込めて、以下では、三谷先生との思い出を記したい。

三谷先生に初めてお会いしたのは、おそらく私が博士課程の院生の頃だろう。石井哲士朗先生の事務局でお手伝いしていたこともあり、企画編集委員会や研究発表会でしばしばその姿をお見かけした。2009 年に私が事務局を担当してからは、企画編集委員会、あるいは打ち上げの場でしばしばご一緒する機会に恵まれた。口数は多くないものの、時折挟む発言は知性に裏付けられた鋭いもので、懇親会の席では風刺を込めた辛口のコメントをされたことも印象に残っている。

たしか、その頃から、西スラヴ以外の研究者も参加しているので「西スラヴ学研究会」という名称から「西」を取ってはどうかという議論が始まったように思う。これは西スラヴを専門とする委員からの提案だったと記憶している。これに対し、南スラヴをフィールドとされている三谷先生も「西」を取るべきだという意見を表明されるかと思ったら、「元々、西スラヴの研究者が中心になってできたのだから、名称は変えなくてはいいいのではないか」という主旨の発言をされたことを覚えている。おそらく吉上昭三先生、千野栄一先生が作った研究会の礎という歴史的な経緯を尊重されたうえでの発言だったと推察する。だが、周知の通り、2012 年 7 月、本会は名称を「日本スラヴ学研究会」に変更し、三谷先生は文字通りの *slavist* として本会を牽引する存在となった。

2013 年には、三谷先生は東大文学部スラヴ語スラヴ文学研究室に所属を移され、文字通りここで研究・教育に力を存分に発揮されることとなる。京都大学にまだ在籍されていた頃、勤務先の状況をお尋ねしたことがある。その時は、組織の関係上「ここでは専門教育はできない」とこぼしていらっしやった。だが本郷に移ってからは、

傍から見ても驚くほど、スラヴ語の教育に熱心に取り組まれていた。個人的に少し関係が近くなったのは、2016年、私が東大文学部現代文芸論研究室に移籍し、文字通り隣の研究室（現代文芸論研究室は、文学部3号館8階のスラヴ研究室の隣に位置する）で同僚になってからである。着任早々の4月には、スラヴ語学スラヴ文学研究室の懇親会に招いてくださり、ロシア、ウクライナ、ブルガリアなど様々な研究者、留学生に囲まれて、和気藹々に歓談されている様子が今でも目に浮かぶ。その時、「ここですべてのスラヴ語を教える機会を作るのが夢だ」と目を輝かして話して下さったが、毎年非常勤の先生を入れ替えて、その計画も着実に実現されている。

勤務先と同僚として親しくなったこともあり、立ち話やエレベータが一緒になった折に、本会のことについてもいろいろと話す機会があった。2019年春、私が企画編集委員長の任期を終えたとき、次期委員長としてまず頭に浮かんだのが三谷先生だった。本来であれば、業績、世代の面でも三谷先生が先に委員長に就任するべきだったと常々思っていたからである。とはいえ、当時、三谷先生はロシア文学学会会長もされていて、依頼しても断られるのではないかと内心躊躇していた。だが他に適任者はいないと腹を括って、姿をお見かけ次第依頼しようと決心した。ある時、文学部3号館8階の廊下で偶然お姿をお見かけしたので、早速、次期委員長職を打診したところ、「ああ、いいですよ」と、こちらが拍子抜けするほど、二つ返事で快諾して下さった。それから委員長として同委員会、そして本会の運営を導き、亡くなる直前までメールやオンライン会議など作業を牽引されてきた。スラヴ語スラヴ文学研究室の教授として、そして日本スラヴ学研究会の企画編集委員長として、そして何よりも slavist として、三谷恵子先生は生涯を終えたと言えるだろう。

ここで、三谷恵子先生の仕事にも少し触れたいと思う。研究の領域においても、三谷先生は稀有な存在であった。本会は「スラヴ学」という名称を冠しているが、スラヴの個別の言語文化を専門する者が実質的には大半であろう。そのような中、三谷先生がスラヴ語全般に広く目配りされていたことは、『スラヴ語入門』（三省堂、2011年）、『比較で読み解くスラヴ語のしくみ』（白水社、2016年）といった啓蒙的な書物からも十二分に伝わってくる。スラヴ言語学者としての仕事の学術的な評価は他の方にゆだねるとして、ここで私がむしろ強調したいのは「翻訳者」としての仕事である。

かつては千野栄一先生など言語学、文学の両方にまたがり活躍される方もいらっしやっただが、昨今は研究領域の細分化という流れもあり、言語学者が、文学、とりわけ文芸翻訳に従事することは稀になりつつある。スラヴ学者としての存在が圧倒的だったせいだろうか、翻訳者としての側面は言及されることがやや少ないように思われる。単行本としては、スラヴェンカ・ドラクリッチ『バルカン・エクスプレス』（三省堂、1995年）、ミロラド・パヴィッチ『帝都最後の恋』（松籟社、2009年）、メシヤ・セリモヴィッチ『修道師と死』（松籟社、2013年）、ミロラド・パヴィッチ『十六の

夢の物語 M・パヴィッチ幻想短編集』(松籟社、2021年)がある他、ジェヴァド・カラハサン「一九九三年の手紙」、ミリエンコ・イェルゴヴィッチ「盗み」(中東現代文学研究会編『中東現代文学選 2012』中東現代文学研究会、2013年)といった翻訳も手掛けている。

セリモヴィッチ『修道士と死』は二段組四百頁を超える大著であるだけでなく、コーランをしばし参照する、ボスニアの文化的な蓄積を感じさせる一冊である。特筆に値するのは、セルビアの作家、文学史家ミロラド・パヴィッチの作品を二冊訳出されたことだろう。パヴィッチの名前は『ハザール事典』の著者として長年知られていたが、これらの翻訳によってパヴィッチの世界が広がりを増したことは日本の読者にとって喜ばしいことである。『帝都最後の恋』は「タロット小説」というユニークな体裁を取るが、遊戯性が顕著な作品の訳文だけではなく、二十五頁に及ぶ渾身の訳者解説『帝都最後の恋——作家、作品、そしてセルビアの文学と言葉』にも目を通して欲しい。パヴィッチの来歴を紹介するだけではなく、近代セルビア文学史の断章として優れた文章となっている。2021年10月に刊行された日本独自編纂の『十六の夢の物語』もまた、史実と虚構の境界を行き来する幻想譚である。担当編集者の木村浩之氏によれば、病床にあった三谷先生より、どうしてもこの本は訳したいという要望があり、予定を進めて短期間で刊行に至ったという。病気を抱えながら、パヴィッチを訳出していた三谷先生的心中は察するにあまりあるが、歴史的にも、言語的にも深みのある物語を最後に訳出されたことについては感謝の言葉しかない。

残念ながら、三谷先生とは、もはやスラヴ語について、ザグレブの街並みについて、そしてパヴィッチについて言葉を交わすことはできない。だが残された著書、訳書、論文は、パヴィッチの文学世界同様、読者に開かれており、私たち残された者は、その気になればいつでも活字に触れることができる。

心よりご冥福をお祈りします。